



Title	中国語複合動詞の語形成と意味：日本語との対照を中心に
Author(s)	王, 蓓淳
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59146
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【3】

氏 名	おう 王 ばい 蓓 ジョン 淳 (Wang, Pei-Tsuen)
博士の専攻分野の名称	博 士 (言語文化学)
学 位 記 番 号	第 2 4 8 4 9 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 23 年 6 月 30 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学 位 論 文 名	中国語複合動詞の語形成と意味—日本語との対照を中心に—
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 由本 陽子 (副査) 教 授 深澤 一幸 准教授 宮本 陽一

論 文 内 容 の 要 旨

本論は意味解釈の側面に焦点を当て、中国語複合動詞の語形成の仕組みを探るものである。モジュール形態論に基づき、既存の動詞を基にしてより複雑な動詞概念を作り出すという意味合成のプロセスを明らかにすることを目的とする。具体的には「変更」、「改変」あるいは「反復」の概念を表す複合動詞「改V」、「重V」に絞って、その語形成のメカニズムと意味解釈のプロセスを詳しく考察し、モジュール形態論の妥当性を支持した。

本論の主な主張は以下の三点にまとめられる。

- (1) 語形成が起こる部門によって、中国語の複合動詞は「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」の二種類に区別されることを示し、語形成部門の違いによって意味解釈メカニズムも異なってくることを明らかにした。
- (2) 複合動詞の中で、結合する要素は独立した動詞概念か、あるいは動詞概念を持たない副詞かによって意味的・統語的違いが生じることを明らかにした。

- (3) 統語部門で形成される複合動詞の中で、意味構造からも制約を受けているものがあることを示し、統語構造と意味構造との間のミスマッチは本論が依拠する表示的モジュール性を想定することによって適切にとらえられることを示した。

論文の構成は以下のようである。

第 2 章では、事象の変更を表す複合動詞「改 V」の語形成と意味解釈を考察した。形態統語的観点からの語彙的緊密性の違いと、意味解釈の差異から、語形成が起こる部門の違いによって、「改 V」は「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」の二種類に区別されることを示した。語彙的「改 V」に関しては、LCS を基盤とする語形成であると主張し、その意味解釈は LCS の合成によって支配され、二つの動詞の組み合わせや項の統語実現の仕方に関する制約が課されることを明らかにした。

一方、統語的「改 V」に対しては統語操作による語形成であると主張し、コントロール構造を補文にするという統語構造を提案した。この提案の妥当性は主語一致の制約が守られることによって支持されることも見た。また、統語的「改 V」は結合する動詞に統語的条件だけではなく、意味的条件も課している。これは、統語的「改 V」は統語構造において補文構造をとっているだけではなく、概念構造においても、「改」の LCS と V2 の LCS とが合成され、新たな動詞概念を形成していることを示した。統語的「改 V」には統語構造と概念構造とのミスマッチが生じることを明らかにするとともに、そのミスマッチについて、概念構造と統語構造においてそれぞれ自立した派生を認められる表示的モジュール性によって説明できることを示した。

第 3 章では、中国語の複合動詞「改 V」と類似した意味機能を果たしていると思われる日本語の「V かえる」を比較対照し、語彙部門で形成される「改 V」と「V かえる」は共通の LCS で捉えられるため、ほぼ対応することを示すと同時に、両者の間の微妙な意味の差異と統語的性質の違いは、変化を表す事象構造において BECOME の起点や着点が属性であるか、それともモノであるかの違いで捉えられることを示した。さらに、変化を表す事象構造について、中国語では原則として手段関係で合成されるが、日本語では手段関係以外に様態や付帯状態で結合されることも可能であること、及び、中国語では「改」と「換」のように、漢字の使い分けによる属性の変更やモノの交換を表すが、日本語では同じ「かえる」で表しうするという違いがあることを示す。

第 4 章では、ほぼ意味的に対応すると思われる「重 V」と「V 直す」を比較対照し、両者は類似した意味機能を果たしているが、結合できる動詞に関する制約や、AGAIN の作用域について、互いに異なっていることを明らかにし、一方は語彙部門、もう一方は統語部門で語形成が行われるという差異に帰せられることを示した。また、着点項と共にする場合、「重 V」は着点項が表す結果状態への回復を表すのに対し、「V 直す」は二回目の事象における結果を表すという違いが観察されることを明らかにし、これは語彙的複合か、統語的複合かという語形成部門の違いによって説明できることを示した。

第 5 章では、反復を表す複合動詞「重 V」の語形成と意味解釈について考察し、語彙的緊密性の高さから「重 V」は語彙部門で起こる語形成であることを主張する。「重 V」の意味解釈には、結合する動詞のアスペクト素性によって、結果状態の回復を表すものと、事象全体の反復を表すものの二種類があることを示し、それぞれの概念構造を明確にした。結合する動詞に結果状態が含まれる場合、反復を表す意義素 AGAIN が後項動詞の LCS 内部に入りこむ形として、V2 が表す事象の結果状態のみを作用域にする構造を提案する。結合する動詞に結果状態が含まれていない場合、AGAIN が V2 の LCS の全体を修飾する構造を提案し、事象全体が反復されることを示す。提案された LCS は様々な動詞に適用し、「重」の作用域、また、結合が可能な動詞の範囲が正しく予測できることを示した。

第 6 章は全体のまとめとする。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、先行研究（影山（1993）、由本（2005））が日本語の複合動詞について提案している、語形成のモジュール性が中国語の複合動詞においても認められることを、特に意味的側面に焦点をあてて示そうとしたものである。具体的には、事象の「変更」「改変」を表す「改+V」と「反復」を表す「重+V」を取り上げ、それらが結合する動詞の意味クラスによって多様な意味を表すことを示し、その観察に基づき、中国語にも語彙部門と統語部門で形成される複合動詞が存在すること、また、その違いによって意味解釈メカニズムが異なることを主張している。

第 1 章では、中国語複合動詞に関する先行研究を簡潔に概観し、従来の分析では解決し得なかった問題が概念構造（LCS）を用いた詳細な意味分析によって解決の道が開かれることを示し、本論が依拠するモジュール形態

論の枠組みについても簡単に説明している。第 2 章では「改+V」の中に、語彙的緊密性と意味解釈との両面において区別される 2 種類があることを明らかにしている。語彙的緊密性のある「改+V」は語彙部門における LCS の合成による語形成であり、二つの動詞の組み合わせや項の具現に制約が課されている。一方、緊密性のない「改+V」は動詞が表す事象がおこったことが必ずしも含意されない計画の変更も表し得るもので、統語的なコントロール構造によって形成されていることが示されている。第 3 章では、語彙部門で形成される「改+V」と類似の意味を表す日本語の「V+かえる」を比較対照し、第 2 章で提示された分析を支持する議論が展開されている。これらがほぼ共通の LCS で捉えられることを示すと共に、対応関係にない場合については、LCS 上の項の選択素性の違いと、日本語では中国語には不可能な様態・付帯状況の関係における LCS の合成があるという違いによって説明できると主張している。第 4 章では、「重+V」とこれにほぼ対応する「V+直す」とを比較対照し、結合できる動詞の制約や「重」および「直す」が表す反復の意味 AGAIN の作用域において異なっていることを明らかにし、この違いが、前者は語彙部門、後者は統語部門における形成であることに帰せられると主張している。第 5 章では「重+V」についてさらに詳しく考察している。「重+V」は、その語彙的緊密性の高さによって、語彙部門で形成されるとし、また、結合する動詞のアスペクト素性によって結果状態の回復を表すものと、事象の反復を表すものの 2 種類に区別されると主張している。第 6 章は、全体のまとめとして、「改+V」と「重+V」の交替可能性について論じ、中国語においても語形成のモジュール性が認められることを主張している。

中国語の複合動詞に関しては、膨大な先行研究があるが、本論文のように LCS を用いた語彙意味論的な分析によって精緻な意味記述をするのみならず、二つの動詞の意味の合成の仕方や項の具現について形式的な分析をしたものは他に類を見ない。また、タイトルには反映されていないが、英語の派生動詞 re-V との比較などもなされており、中国語の語形成に留まらない、語形成論全般に貢献する議論が展開されている点でも非常に意義深い論文である。ただ、意味分析については本論文で扱われていない他の複合動詞にも応用できるような十分に洗練された形式化が示されているのに対し、統語部門で形成される「改+V」の分析については、提示されたデータすべてを十分に説明しているとはいえない部分があるのが残念である。この点は将来の課題として残されているとはいえ、本論文の語形成論における意義は大きく、博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認められる。